

フロンティアスクール報告書

都道府県名 広島

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	向原町立 向原 中学校					教員数
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	
学級数	2	2	2	0	6	13
生徒数	43	50	42	0	135	

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の定着を図り，自ら学び考える生徒の育成

2. 研究内容と方法

（1）学年・教科

研究仮説 1

「学校生活のさまざまな場面で，個々の生徒のセルフエスティーム（自尊感情）を高めれば，内発的な学習意欲が高まるであろう」

- ・ 全教科及び学級活動において実施。
- ・ 「学校生活のさまざまな場面で内発的な学習意欲」の向上を図るため，2学期4クォータ制とそれに伴うテスト - 評価 - 教育相談の実施や，学級づくり，授業づくりの研究実践をおこなう。

研究仮説 2

「教科の学習場面で，効果的な学習形態や指導方法を工夫すれば，基礎・基本の知識・技能の定着が図られるであろう。」

- ・ 全学年の数学科，英語科において実施。
- ・ 生徒の理解状況に差が出やすい教科であるため，I.T指導や習熟度別指導などの学習形態や指導方法の工夫をおこなう必要性が特に高いと考えられる。

研究仮説 3

「内発的な学習意欲と，基礎・基本の知識・技能を身につけた生徒たちに対して，学習場面において，教材や指導法を工夫すれば，学習意欲と基礎・基本の知識・技能が相乗効果を起こし，思考が促進され，より一層，思考力と判断力が身につくであろう。」

- ・ 全学年，全教科において実施。
- ・ 各教科の相乗効果により「思考力・判断力」の伸長を旨とする。

(2) 年次ごとの計画

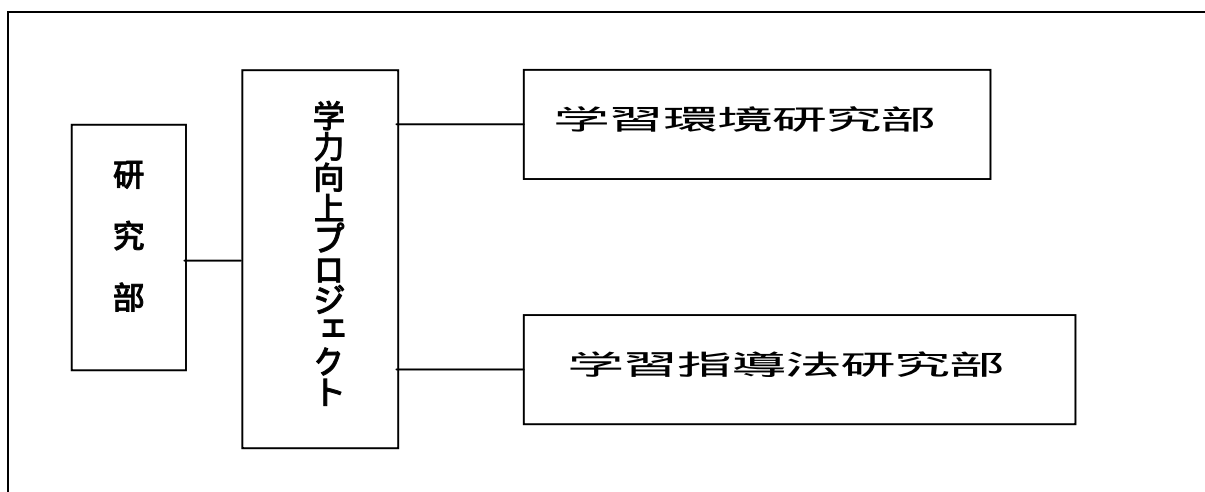
平成 14 年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をはかり，自ら学び考える力を育てるためにはどうしたらよいか ～学習環境・指導法の改善を通して～</p> <p>仮説1 学校生活のさまざまな場面で，個々の生徒のセルフエスティーム（自尊感情）を高めれば，内発的な学習意欲が高まるであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none">・ 学習意欲との深い関係が予想されるセルフエスティーム（自尊感情）を構成する自己決定感，自己効力感，他者受容感との関連づけのモデルを構築する。・ 各構成成分を高めるための，学級づくり，授業づくり，学習規律をマニュアル化し実施する。・ セルフエスティームと学習意欲の変移を測定する。
----------------	---

平成 15 年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をはかり，自ら学び考える生徒の育成 ～学習指導法の工夫・改善と学習環境づくりを基にした， 思考力・判断力の伸長をめざして～</p> <p>仮説1・2</p> <ol style="list-style-type: none">1 学校生活のさまざまな場面で，個々の生徒のセルフエスティーム（自尊感情）を高めれば，内発的な学習意欲が高まるであろう。2 教科の学習場面で，効果的な学習形態や指導方法を工夫すれば，基礎・基本の知識・技能の定着が図られるであろう。 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none">・ 研究仮説1にかかわっては，平成14年度の研究を継続し，各構成成分を高めるための，学級づくり，授業づくり，学習規律にかかわりマニュアル化したものを実施する。〔別添資料参照〕・ 研究仮説2にかかわっては，数学科，英語科において，T・T指導，習熟度別学習指導のあり方について研究し，教材との関連性を考慮したうえで，いくつかの形態を構築する。・ 公開を含めた授業実践をおこない，検証する。・ 定着度の変移を測定し，検証する。
----------------	--

平成 16 年度	<p>テーマ 基礎・基本の定着をはかり，自ら学び考える生徒の育成 ～学習指導法の工夫・改善と学習環境づくりを基にした， 思考力・判断力の伸長をめざして～</p> <p>仮説3 内発的な学習意欲と，基礎・基本の知識・技能を身につけた生徒たちに対して，学習場面において，教材や指導法を工夫すれば，学習意欲と基礎・基本の知識・技能が相乗効果を起こし，思考が促進され，より一層思考力と判断力が身につくであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考力を高めるための指導方法や指導体制を実践する。 ・思考力を育てるための教材開発をおこなう。 ・思考力を測る方法を開発する。 ・全教科において実践し，検証をおこなう。 ・今年度の研究は，平成15年度に実践した研究仮説1及び2を継続的に実践しながら，本年度の仮説検証をおこなう。
----------------	--

(3) 研究推進体制

研究組織



学力向上プロジェクト組織は，学習環境研究部と学習指導法研究部の2つの研究部から構成され，教員はいずれかの部に所属している。

学習環境研究部は，「関心・意欲・態度」面，すなわち学習意欲の向上をめざし，その基盤となる学習規律，集団づくり（仲間づくり），生徒理解（カウンセリング）などの研究を中心におこなう。

学習指導法研究部は，学力の「知識・技能」面と，「思考・判断」面に焦点をあてた研究を進め，「基礎・基本の定着」「思考力・判断力の向上」のための学習指導報や授業改善の先駆的な研究をおこなう。

平成15年度の研究成果及今後の課題

1. 研究成果

(1) 研究仮説1にかかわる成果

自己効力感を高めることで内発的な学習意欲が高まった。

- 自己効力感が高まり、特に自己に対する将来への自信がついてきた。
- 内発的な学習意欲が高まった。特に達成意欲や挑戦しようとする意欲が高まった。
- これらの成果は、生徒の感想から各教科の授業における自己効力感を高める取り組みも効果があったと考えられるが、加えてリトライテストが、達成意欲、挑戦意欲を高めるような形で実施されたことが上昇の大きな原因となったと思われる。
- 自己効力感を高める取り組みによって、より内発的な学習意欲が高まったのは、学力高位層よりも学力低位層であった。

<自尊感情（自己効力感）を高めるための取り組み>

テスト・評価のシステムを自己効力感を高めるものに変える。テストの捉え方を改善する。
テストとは、「自分の現在の学習内容の理解の程度を知るもの。そこから、自分ではできるようになったところと、理解できないでつまづいているところをはっきりさせ、学習のしかたを振り返るためのもの」という捉え方をさせる。

テストの実施方法を改善する。

- 定期テストは、前期、後期末テストの2回とする。
- その他、「確認テスト」「単元末テスト」を、単元終了ごとに行い、これらを「フィードバックテスト」と呼び、診断的・形成的評価としてのテストとして考える。
- 「フィードバックテスト」は分析され、その後、教育相談等の学習改善の資料となる。
- 「フィードバックテスト」も成績につながるテストではあるが、再チャレンジ可能なテストとし学習をやり直し、教科担当の判断により1、2回の再テスト（「リトライテスト」）を受けることができる。
- 実施時期や実施時間、実施回数は、教科担当の判断による。
- 「リトライテスト」の結果は、100%認めることにし、前回の結果と置き換える。

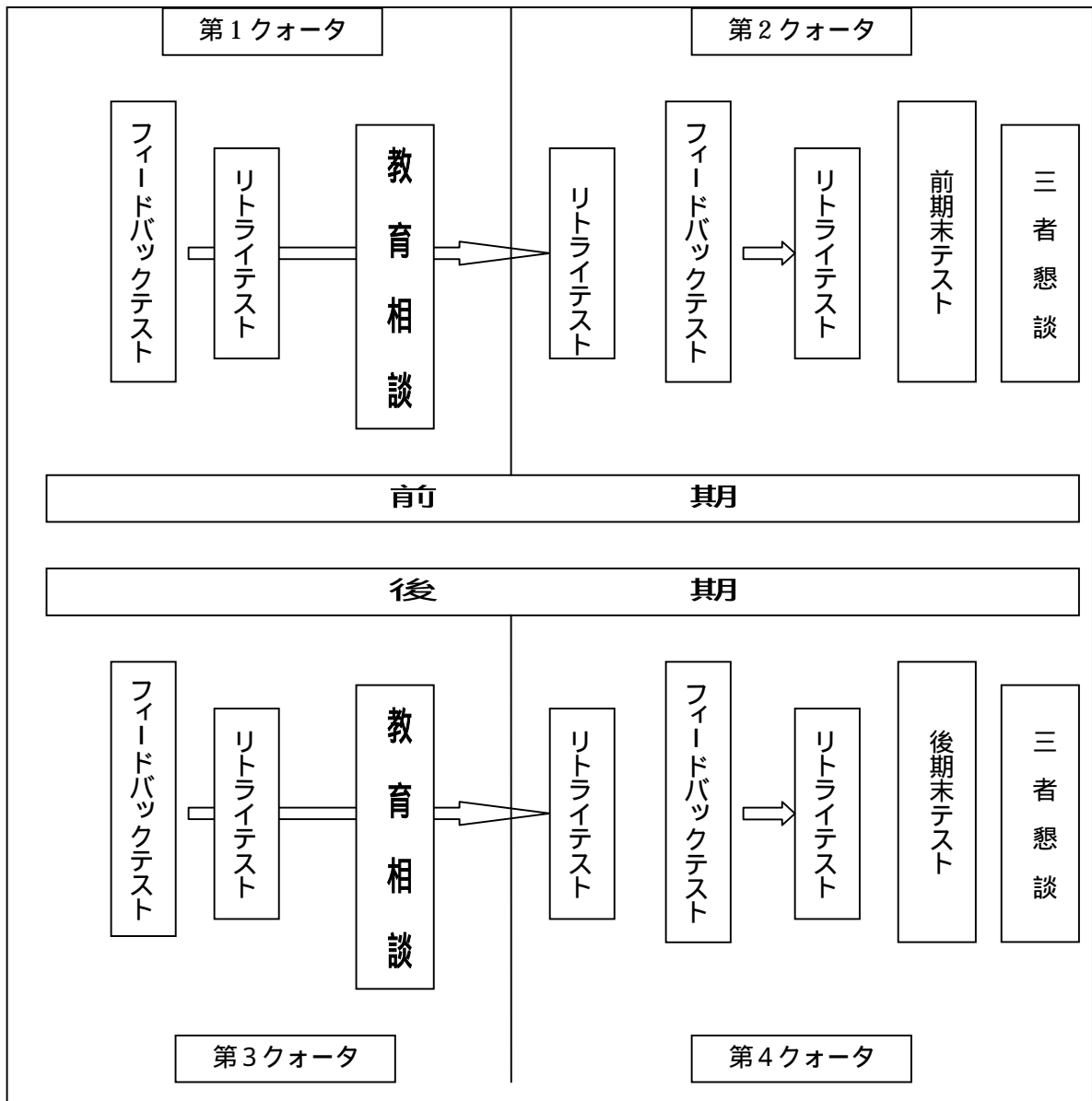
2 学期4クォータ制により、短いスパンで学習の振り返りをおこなう。

およそ3ヶ月が学習のまとめりとなり、テストの実施によって生徒個々は自分自身の学習の理解度チェックや学習方法の振り返りをおこなうことができる。

第1、第3クォータ末には、生徒に対し教科の指導者が教育相談を行い、生徒個々へアドバイスを与えることにより、より具体的な学習方法の改善が可能である。

第2、第4クォータ末には、学級担任と保護者・生徒との3者懇談をおこない、前・後期それぞれの学習への取り組みの評価が与えられる。

2学期4クォーター制の流れ



<自己効力感を高める機会をつくりだす授業展開>

授業内において生徒の成功体験がもてるようにする。
自分にあった目標をたて、生徒間で評価する。
授業準備と工夫に力を入れた。

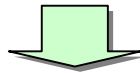
自己効力間を高める機会を作り出す授業展開

学習の入口

学習教材として、知的好奇心の喚起できるものを提示する。

自己決定による目標の設定を行わせる。

- ・ 授業内容にかかわるもので、具体的なもの
- ・ 難易度の低いものから高いものへ
- ・ 短期から長期へ
- ・ 1時間に1つ程度



学習の出口

目標の達成（成功） 自己効力感の機会

適切な評価（自己評価，他者評価） 自己効力感，他者受容感の機会

目標が達成できなかったとき

（今の学習に自分にとっての意味を見出すこと）

- ・ どこがわかって、どこで止まってしまったのか。
- ・ 学習するためには、どのようなやり方をとればよかったのか、など。
- ・ 最終的には、自分の能力のせいにはさせてはいけない。「努力」または「運」のせいにするのも健康的。

各教科においてその教科内容の領域で簡単な質問紙で、自己効力間を測定していく。

(2)研究仮説2にかかわる成果

習熟度別グループ指導は定着度・理解度を大きく上げる効果がある。

TT 指導

- ・ 生徒の実態がよく把握でき、子に応じた支援ができる。
- ・ 複数の指導者が違った角度から説明することで、より印象深くなったり、理解が深まったりしている。
- ・ よりきめ細かい専門的な指導ができ、生徒の学習内容の理解する助けになっている。

習熟度別グループ学習

- ・ 生徒が自分の学習速度で進めることができるため、意欲の向上につながる。
- ・ グループ内の助け合いが見られお互いに切磋琢磨していこうとする様子がみられる。
- ・ 個々の生徒の目標が明確であるため、積極的な学習態度が見られ達成感を感じる生徒が多い。
- ・ 指導者が生徒個々に応じた支援ができる。

数学科及び、英語科で学習形態・指導法の工夫・改善を実践してきたが、その一例として今回は数学科における例を掲載することにした。

<学習形態の工夫>

次のような3つの学習形態を内容に応じて実施することにした。

T・T指導

一つの学級を2名(教科内)の指導者が協力して指導する。

- ・ T1が中心的に学習活動を進めると同時に、T2は個々の生徒の状況を把握し、個別に指導したり、生徒のつぶやきを拾い上げたりする。生徒の疑問の多くを解決できる。
- ・ 課題に対して、T1が一つの考え方を示し、T2が別方向からの考え方を示すなど、いろいろな角度から課題解決に迫るモデルを出すことによって、生徒の考えが深まる。

このT・T指導は、「A数と式」領域や1年生の「B図形」領域と「C数量関係」領域において、実施することを基本としている。T・T指導によって、各領域の基礎・基本事項を一斉指導した後、その習熟の度合いに応じて習熟度別グループ(同一教室内3グループ)指導へと移行する指導形態として実施する。

習熟度別グループ(同一教室内3グループ)指導

一つの学級を生徒の習熟度に応じて3つのコース(基礎・標準・発展)別に問題演習に取り組む。2名の指導者(教科内)は、主に基礎コースと標準コースでの個別指導に当たり、発展コースは自学することを基本に置く。

この習熟度別グループ(同一教室内3グループ)指導は、「A数と式」領域や1年生の「B図形」領域と「C数量関係」領域においてTT指導の後に実施する。

実施に際しては、以下のような方法を取り、自己学習や必要に応じて教え合いの体制

をつかって、理解力の向上を図る。このことにより、学習集団としての質的の向上もねらっている。

〔実施の方法〕

- 生徒自身でコースを選択決定する。
 - ・ 生徒は「コース別学習希望調査問題」によって、3コースの中から選択する。
 - ・ この調査問題は各家庭で取り組ませ、保護者への理解と協力を要請する。
- 個々のペースで学習を進める自学自習をおこなう。
 - ・ 生徒は自分のコースの課題プリントを個々のペースで進め、終了すると各自で答え合わせをおこなう。
 - ・ 途中の演算式を書き込むようにさせる。
 - ・ コース内での教え合いは認める。
- 生徒全員が全てのコースの課題と解答を持つ。
 - ・ 全てのコースの課題を持つことにより、学級の仲間がどのような課題に取り組んでいるかを知ることができ、学習集団としてのつながりを作ることにつながる。
 - ・ 自分が選んだコースの課題が完了すれば、他のコースの課題に挑戦する。
 - ・ B（ベイシック）コース、S（スタンダード）コースの生徒は、さらに高いレベルの課題へ挑戦する。（学習意欲が高まる）
 - ・ A（アドバンス）コースの生徒は、完了すればB、Sコースの課題にも取り組み、その後、他の生徒に教えることで理解がさらに深まる。
- コースの途中変更を認める。
 - ・ 自己の持つ現在の力を的確に把握することは、重要な課題である。自らが選んだコースが適切であったか否かを判断させ、適切に自己評価する力を養う。
- 競争原理によらない。
 - ・ 他人との比較によって学習していくのではない。自己の力を伸ばすことが第一の目的である。コース内で、あるいは発展コースの生徒が標準コースや基礎コースの生徒と教えあうことによって共に学ぶ姿勢を養う。

習熟度別少人数（異教室2グループ）指導

原則として生徒の自己決定によって学習状況の似た少人数グループに分かれ、異なる教室で学習を進める。

2つのグループは、B（ベイシック）コースとA（アドバンス）コースとし、Bコースは、復習部分を多く取り入れながら学習を進め、これまでの学習で理解が不十分であった内容を再度見直しながら学習を進める。Aコースは、発展的な課題を含めた学習をおこない、自らの力をさらに伸ばす学習を進める。

2つのグループとも、進度は共通になるように調整し、学習の深度を変えた指導をおこなう。

人数が少なく、また理解状況に近い集団となるため、通常の授業よりさらに疑問や考えを出しやすく、他人の疑問が自分の疑問と近い状況が生まれ、学習が進む中で理解が今まで以上に深まる。

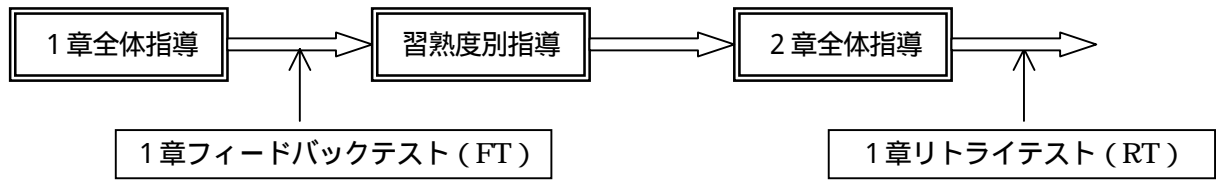
習熟度別少人数（異教室2グループ）指導は、2年生・3年生の「B図形」領域や、「C数量関係」領域において、実施している。

この領域では、生徒のレディネスの状況に大きな差が生じている場合が見られることが多い。このような状況では、一斉指導やT・T指導では個々の生徒に十分な学習効果が得られないと考えられる。したがって、単元の学習開始時に「コース別学習希望調査

問題」に取り組みさせることによって、生徒個々の状況に応じた学習ができるようにする。

実践例(第3学年:数学)

第3学年『1章 式の計算』において、習熟度別グループ指導の実践(2時間)を次のような流れで行った。

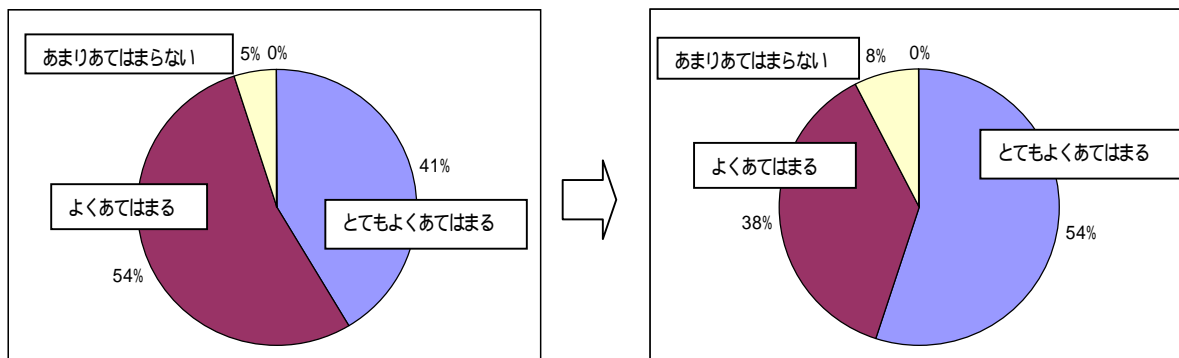


習熟度別指導(2時間)を実施し、2週間後にリトライテストを行った結果、計算問題は78.0% 78.9%とほぼ同じ通過率であったが、応用的な問題では34.1% 57.1%と大きな上昇となった。と考えられる。習熟度グループ指導は定着度・理解度を大きく上げる効果がある。

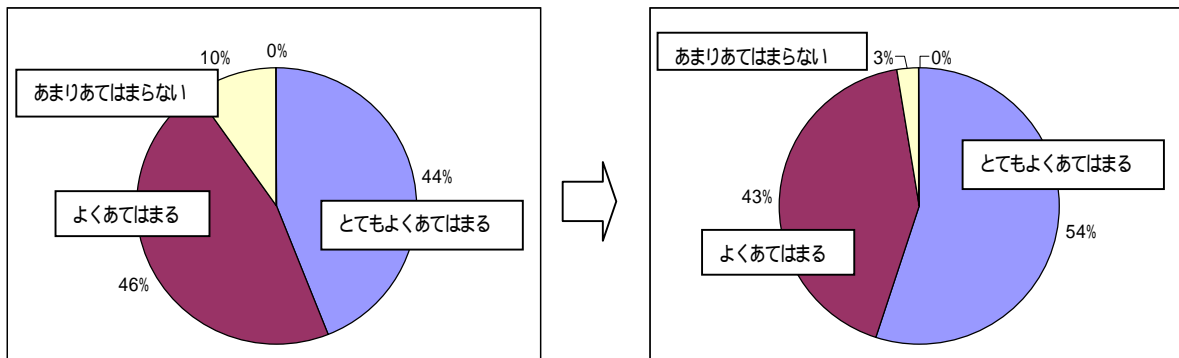
学習後の生徒の自己評価と分析

学習内容の理解度 (左 FT 右 RT)

【図1】



学習の満足度 (左フィードバックテスト, 右リトライテスト)



また、習熟度別グループ指導は、図1の調査結果から生徒の学習に対する意識的な側面からも大きな効果が見られるといえる。

2. 今後の課題

本年度より学校体制として2学期4クォータ制を取り入れているが、年間を通しての生徒の学校生活がどのように変化していくかなど、まだまだ整理していかなければならない点が多い。特に、フィードバックテスト 教育相談 リトライテスト 評価という流れをよりスムーズにし、さらに成果があるように実践方法を整理・検討していく。

研究仮説1にかかわって、自尊感情を高めるためのいくつかの取り組みによる検証をおこなってきたが、今後も条件をさまざまに変えながらさらに検証を繰り返していく。

T・T指導、習熟度別指導、少人数指導の成果をもとにしながら、その取り組みを数学科・英語科に限らず他教科への拡充をおこない、各教科での基礎・基本の知識・技能の確かな定着を図っていく。

研究仮説3「思考力・判断力の育成」にかかわって、現在、思考力とは「既習知識を関連づける力」と定義し、「再生的な思考」と「創造的な思考」に焦点を当て、各教科においてその育成のための取り組みを実施中である。今後は、仮説1「内発的な学習意欲の育成」と仮説2「基礎・基本の知識・理解の定着」の検証による成果を有効的に併せ「思考力・判断力の育成」を推進していく。

学力把握のための学校としての取り組み

CRT

- ・ 毎年、年度末(2月末)に、国語・数学・英語の3教科において実施する。
- ・ 年間の学習内容の習熟度状況を全国との比較及び前年度との比較によって、指導法の工夫・改善を図ることを目的とする。

単元末・クォータ末のテスト

- ・ 各教科において実施する。
- ・ 短いスパンでの学習内容の習得状況を把握し、指導方法の工夫・改善を図る事を目的とする

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究公開

- ・ 平成15年11月7日(金)
- ・ 向原中学校及び向原小学校(全体発表・講演)
- ・ 県下全中学校, 及び地元高等学校への参加案内
- ・ これまでの研究の成果を発表した。当日は, 大阪府下中学校の参加もあり, 県内外から広く意見や実践の例示をいただいた。

他中学校での研究実践の発表

- ・ 平成15年12月22日(月)
- ・ 京都府天田郡三和町 三和町立三和町学校
- ・ 三和中学校職員及び町内小学校職員
- ・ 2学期4クォータ制の実施, 学習活動 テスト 評価 教育相談の実践及び指導法の工夫・改善について, 本校の研究実践を発表した。

視察の受け入れ

平成15年9月12日(金)

- ・ 山口県長門市立深川中学校
- ・ 授業参観後, 2学期4クォータ制の実施, 学習活動 テスト 評価 教育相談の実践及び指導法の工夫・改善について, 本校の研究実践を説明した。

- ・ 平成15年12月3日(水)
- ・ 鳥取県日南町立日南中学校
- ・ 授業参観後, 2学期4クォータ制の実施, 学習活動 テスト 評価 教育相談の実践及び指導法の工夫・改善について, 本校の研究実践を説明した。

日本教育新聞における実践報告

- ・ 平成16年1月9日(金)付 全国版
- ・ 「改定指導要領に向けた実践『確かな学力』育成への工夫」において実践が掲載される。

教育セミナー中国2004にて誌上実践報告

- ・ 平成16年1月31日(土)
- ・ 教育セミナー中国2004「生き生きとした学校の創造」でのレジューメ誌上に実践が掲載される。

研究成果普及のため, プレゼンテーションを作成

また, HPへの研究成果の掲載を準備している。

芸北地区協議会において, 管内小・中学校に研究の方向性や具体的な取り組みなどについて発表。

- ・ 第1回芸北地区協議会 7月29日 千代田町役場
- ・ 第2回芸北地区協議会 11月7日 向原小学校・向原中学校
- ・ 第3回芸北地区協議会 12月9日 土師ダム研修センター
- ・ 第4回芸北地区協議会 2月5日 芸北地域事務所

自尊感情を高める学級づくりと生活指導

(1) 学級の「仲間づくりの文化」づくり

<p>クラスとして協力して、燃えるような行事をしくみ充実させること。 生徒会行事（合唱コンクール、文化祭など）を通して 学級行事（調理、スポーツ、学期レクなど）を通して クラスの中の課題を常に意識し、自分たちの力で解決していくことに価値をもたせ、それを積極的に支援すること。 暮会での班、学級の話し合いの充実、班長会議の充実をはかる。 仲間づくりのためのクラスのルールをつくっていくこと クラス目標づくり、クラス原則づくりをおこなう。 生徒の個性を把握しながら、その生徒の個性を生かした学級での役割を与えること。 係活動、生徒会役員活動を通して 話すことよりも聞くことを重視すること。 定期的な班や学級の話し合いをおこなう。</p>
--

(2) 班編成と班活動

班の意義は、班を単位とした子どもの自主的な活動を指導することにある。

<p>班の編成方法と班長会議</p> <p>機能性の点から、5～6人の班員で4～5班で編成する。 初めての班は、くじ引きなど偶然性で編成されたものでおこなう。2回目以降の班編成を考える場とする。 編成方法は、学級の子どもが話し合い教師の助言できめる。 学級の自治意識が高まってきたら、班長立候補制にし、班長による班編成会議を行う。 班を編成することよりも、編成してどんな目標でどんな活動をするかを大切に する。 定期的に班長会議をもち、担任とともに、班のメンバーの生活や授業のようす、係活動のようす、目標の達成度などを確認し、すべての班が向上するように話し合う。</p>

<p>授業における班活動</p> <p>班員どうしによる学習の理解のようすをチェックしあうようにすること。 一日の中で全員が発言できるようにすること。 仲間の気持ちを大切にしたい支えあい、学びあいができるようにすること。</p>
--

<p>班の話し合いの指導</p> <p>話し合いをさせるときは、子どもたちの思考活動を誘発するような問題性を含んでいること。 課題が理解され意識されていること はじめは教師側から、慣れてくれば自分たちから時間設定をさせること。（10分以内） 必ず司会を決め、挙手や指名で発言しあうこと まとめる作業はさせず、そのまま出させること</p>
--

<p>全員発表をめざすこと 多用しないこと 1分前を告げること 話し合いの結果は、全班とも出させること。 班の話し合いの成果を発表する人も決めさせること 個々の話し合いの成果を肯定的に評価すること</p>

<p>係活動を活発にするために</p> <p>「決められ、所属させられる集団」から「自ら選んだ自分の集団」に高めるために 組織づくりに全生徒が参加すること 係の仕事内容、責任がはっきりすること 公平な仕事分担であること 係どうしが強調しあえること 係は自主的、自治的な活動であること</p> <p>組織図・・・これを基本とすること</p> <p>週1回30分の活動時間をとる。日常は、朝の会や帰りの会（朝会、暮会）で、打ち合わせの時間をとる。 月に1回、お互いの活動の評価をする。改善するところはすぐに改善する。かならずプラスの評価をする。</p>
--

(3) 学習規律

学習規律とは、学級の子どもたちが自主的な学習活動を進めるにあたって必要となるルールやマナーである。これは学級の教師と子どもたちが協力し合って創造するものである。

<p>発表の仕方（表現の仕方）</p> <p>前の人意見に付け加えて、ふくませる。 発表回数の少ない人を優先する。 声や挙手の仕方、立ち方にも気をつける。 わかりやすいように黒板やものを使って説明する。 聞き手の表情にも気をつけて発表する。</p>
--

<p>発表の聞き方（応答の仕方）</p> <p>発表者のほうを向いて聞く うなずきや「はい」の返事をしながら聞く 聞こえないときは「聞こえません」という 自分の意見と比べながら聞く</p>

<p>班やリーダーの活動（助け合い方）</p> <p>発表回数の少ない人を助ける 班員の参加や理解などを確かめる 班での予習・自習・練習の提案をする</p>
--

<p>その他</p> <p>チャイムの前に学習の準備をすませる。教科書・ノートなど机に出しておく。 日直の合図で学習のはじめの挨拶をする。 学習のテーマや教材を板書する。</p>

学習係が教材教具を用意し、指示をする。

(4) 学習習慣と学び方の指導

宿題をする習慣

漢字や計算のドリルのようなものでは、宿題をする習慣はつかないと考えよ。
その日や次の日の授業に関連するような宿題をだすようにする。
その日のうちに、宿題の点検評価をすること。

調べる習慣

調べるノートを用意すること。
最初のうちは、辞書・図鑑などで、調べる方法を教えること。
教えすぎないこと、知らないふりもときにははすること。
調べられる学習環境をつくっておくこと。

傾聴すること

聞くことに集中するために、授業の最初に、精神的に集中できる状態をとること。
授業中、いくつかの単語や短文を読みとらせ書かせるなどの聴写をとり入れること。

学び方

計画の立て方

- ・総合的な学習などさまざまな教科等で学習計画を立てる機会をもつこと。
- ・できそうな計画を立てさせること。
- ・具体的な計画を立てさせること。
- ・「計画・実行ノート」をつくっておくとよい。
- ・定期テストにむけての、学習計画表を作成させること。
- ・かならず肯定的に評価してやること(80%をよしとする。)

ノートのとり方

- ・間違いがないように正確にとること
- ・日付をかく。行をあける。見出しをつける。箇条書きにする。余白をつくる。枠をさる。など、見やすく、わかりやすくとらせること
- ・ノートは定期的にチェックし指導すること。よいノートの例を見せること。
 - ・自分の意見は、まずノートに書いてから、発表させること。
 - ・自分の考えたことや、考える上で書いたことは、消させないこと。

(5) 自己理解を深め、生き方を探求させる指導

自己理解を深める指導

生徒が自己理解を深め、社会のあり方や自己の将来の生き方などについて考え、判断して行動することができるような場を意図的に設定すること。
種々の体験学習やボランティア学習を積極的に取り入れること。
自分の健康状態、得意科目、不得意教科、趣味、特技、性格、能力など、適性、興味・関心や将来自分がつきたい職業や職業観、さらには「生きがい」等についても考えさせること。

生き方を探求させる指導のあり方

生き方を考えられるような「地域で働く人々の様子」などの体験学習を計画すること。

その生き方に対して、つぎの3点を柱にすること。

- ・どんな喜びや夢があるのか
- ・どんな苦勞があり、どんな努力が必要とされているのか
- ・この仕事を、最終的に決断したのは、どのような理由によったのか。

中学校時代の学校生活や家庭生活、私生活などにおける自己の価値観を理解すること。

- ・話し合いを通して、他の価値観にふれ、価値観の多様性を認め、他を尊重する姿勢を生み出させること
- ・同じ場面に直面しても各自の価値観のありようによって、選択は千差万別であることを理解させること。

(6) 学習環境づくり

あらゆる場所は学習の場

- 「何だろう」を大切にする
- 「おもしろそう」に共感する
- 「やってみよう」をじゃましない
- 「なるほど」をみんなでわかちあう

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる過配の有無】 有 無